
恋姫†無双 望まぬ転生

ユタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋無双 望まぬ転生

【Nコード】

N7030V

【作者名】

ユタ

【あらすじ】

転生……それは神に間違われて殺されたものがすること。だが、神が間違つて人を殺すのか？ 青年は転生をした。神に間違われたわけではない。神の暇潰しのために殺されたのだ。青年は恋姫＋無双の世界に転生する……注意：この作品にはチートというものが含まれます。それが嫌な方はブラウザバックをすることをおすすめします。後作者には文才はなく。ダメ文です。作者はゲームは未プレイです。

プロローグ

SIDE???

うつ……ここは……目の前がどこまでも白色で続く場所に私はい
た……って私!?

「なんで一人称が私になってるのかしら、って口調まで!？」

しかも声は高いしどうゆうことよ!？ってまたあ!？

「あ、起きたのね」

声が聞こえた方を向く……そこには机に読んでいたらしい本を起
き、椅子から立ち上がる羽の生えた女性がいた

「白色の……羽？」

「あなたは覚えてはいないのね」

覚えてない？一体なこと……

「一体なんのこと……」

「……」

女性は無言で近づき……抱きしめる

「え……」

「ごめんね」

謝られる理由がわからない……そして女性……アテナから自分の今の状況を聞いた。どうやら神の一人が暇潰しに下界……人間が住んでいる世界から一人を殺して実験をした……その対象が私……だったらしい。それで外見が博麗霊夢って……しかも女口調は呪いみたいなもので一生このままって言われた。唯つの救いは性別が男だったことかな？これで女だったらもう自殺してたわ

「それで、その神はどうなったのよ？」

「力を没収され人間界に転生したわ。緊急時以外に人間界に鑑賞するのは私たちの中では禁忌なのよ」

「へえ……ま、当然の報いね」

「というより……その口調、板についてない？」

「諦めが肝心だと思わない？」

「え、ええ……そうね」

私はこれでもどうでもいいことと無理なことはすぐ諦めるのよ。だってそうでしょ？粘っても無理なものは無理。なら初めっから諦めたほうが楽なのよ

「（この子……いろいろと変わり者ね……）それより名前は思い出せた？」

「全くよ。一文字も出てこない。それで、今の私はどんな力があるのよ？」

これが一番気になっていたこと。原作の霊夢同様の力なのか……それとも……

「あなたの力は……鬼巫女12Pよ」

「はい？」

いま、なんて言った？

「だから、あなたの体は鬼巫女12Pと一緒になのよ」

鬼巫女12Pって確かあれよね？外傷やらHPは飾りっていうキヤラよね？しかも即指技も何個も持っているという……だから服が原作霊夢みたいな紅白じゃなくて赤一色なのね。というか鬼巫女の力を私に使わせようとしてるなんて……一体何を考えていたのかしらね。私を殺した神は……

「それより、これから私はどうなるの？」

「そうね……ここで殺す覚悟を知ってもらっわ。後はある程度の戦う力を持ってもらってから転生ね」

殺す覚悟だけ……ね

「殺される覚悟はいらないの？」

「あら？あなたは不老不死よ。それに鬼巫女の力があるあなたは死ぬるのかしら？」

……無理ね。殺せる人もいるけど……今の言葉から私が行く世界には、私を殺せる人はいないととれた……でも、油断と傲慢はできないわね。油断と傲慢は自滅につながりそうだし

「それじゃあ、行くわよ！」

「え。ちょ、待ちなさい！？」

私は離れないようにアテナについて行った

〈大体100年後位〉

一気に時間がとんだ？知らないわよ。作者にいいなさい

「それにしても……霊夢はいろいろとやったわね……」

それといつまでたつても元の名前を思い出せないから私はこの体の元となった人物である博麗霊夢を名乗ることにした。ま、いいでしょ。後、アテナが言っていたいろいろは……まあ、本当にいろいろやったわね。東方のスペカ……霊夢野ただけだけど。使えるようになったり。アテナがどこから読んだかわからないバルバ。スと戦わされたり……あれは不死だけど死ぬかとおもったわ……まあ、外傷は飾りなんだけどね……後、私の戦闘スタイルは長さが違う二本の太刀を使った二刀流よ。右のほうが普通の長さより少し大きめで、左のは、少し小さいやつだね。後は両足に合計12本のナイフを携帯してるくらいかしら？他に使うのは原作で霊夢が使った弾幕と鬼巫女のスペカ位かしら？それと、服装は私が起きたときに来てた赤色の巫女服ね。なぜかこれって破けないし汚れないのよね。まあ、洗濯することがないから楽でいいけれど

「そつえば私が行く世界はどこなのよ？」

「あ……」

あつて……絶対に忘れていたわね。この百年くらいでわかったけどアテナはどこか抜けているのよ

「霊夢が行く世界は『恋姫†無双』の世界よ」

恋姫†無双……良くは知らないけど友達が三国志の有名な人物が全員女性で出てくるPCゲームって言うってたわね。まあ、少ししか知識がないけれどね。しかもその知識は……

「性や名はいいけど……字はどうするのよ？」

そう。この名前のことだけ

「あ……」

……本当に抜けてるわね

「どうしようかしら……もう、字と真名が同じってことにしたら？」

投げやりね……ま、それでいいか……他に考えが浮かばないし

「海を越えた先にある国から来たって言えば信じるわよ」

「はあ……分かったわよ。それじゃあ私が向こうで名乗るなは性が博、名が麗、字と真名は霊夢ね」

「そうなるわね。それじゃあ、そろそろ送るわね」

アテナが手をかざすと、私の後ろに一つの白い扉が現れる

「それじゃあ……100年間世話になったわ」

「ええ……またね」

「……またね」

そう言い、私は白い扉を通った

SIDE 霊夢OUT

SIDE アテナ

行っ たわね……

「久しぶりだな。アテナ」

「ええ……あなたも久しぶりね。それであの神はどうなったの？」

「力を剥奪して人間……それも相当な者に転生させた」

あらあら。それはまた、いいわね

「それじゃあ、俺は戻るとするか」

「もう？もう少しゆっくりしていったらどうなの？」

「あいつらが心配するから遠慮しとくよ」

全く……いつまで優先順位は変わらないのね

「ああ。それと。今回の事は緊急事態だ。だからアテナ、百年位はあいつのこと、見守ってやれ」

「あら。いいの？」

「だから言っ たら？緊急事態だっ てな。ああ、それと」
「？」

「何か頼みたいことがあ ったら俺の元に来い。ある程度なら手伝っ てやるよ」

そういい、どこかに転移した。全く。あなたはいつまでも優しいのね……さてと

「久しぶりにカオスと一緒にお酒でも飲みましょう」

私も転移魔法を使 っている場所に転移することにした

SIDEアテナOUT

第一話 出会い

SIDE 霊夢

私は今、アテナが出した扉の中のどれくらい続くかわからない道を飛びながら進んでいる

「全く……いつまで飛んでいればいいのよ？」

私の能力には鬼巫女「あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力」のほか「空を飛ぶ程度の能力」があるから、飛ぶだけなら霊力とか使わないから楽なんだけど……二時間位飛んでいてまだ出口が見えないってのもどうなのよ？

そしてそれから少しすると出口らしい光が見えてきた

「全く……ようやくね」

ふふふ……私を頼ませてくれる人はいるかしらね……

そう思いながら、私はその光のなかに入ってしまった

「……なんでこうなるのかしら？」

私は今、絶賛落下中である。まさか出口と思うところから出たまではよかったけど……それが空中なんてねえ……能力解除しちゃってるじゃない

「まあ、地面に着く前にもう一回能力使って浮けばいいか」

そんな能天気な考えをしながら重力に体を任せて落ちる……そろそろね

私はもうすぐ地面に付くところで能力を使いその場で浮いた。そしてゆっくりと降りる

「ふう……いきなりスカイダイビングはしたくないわよ」

今度アテナに会ったら何しようかな……今回の腹いせに……って私こんなキャラだっけ？

まあ、いいわ。それより……周りは荒野ね……少し歩いてみようかしら？商人辺に会えればいいんだけど……

「……………」

なんで賊なのかしらねえ……しかもざつと見て500人位はいるわね……まあ、アテナのところでは耐久5000人切りなんてものやらされたときに比べたらまだけどね。あれは絶対にふざけてるわ。あの後アテナには鬼巫女のスペカの練習台になってもらったけど。そつえばこの世界でスペカ使ったらどうなるのかしら？……この賊で試してみようかしら

「おい！女！聞いてんのか！」

「あら。ごめんなさいね。聞いてなかったわ」

「てめええ！」

ほんと、短気な奴って嫌いね。私は刀の柄を握り……離れた。それだけで私に迫っていた男は中心からまっぴたつに別れた。何をし

たつて？刀を人間が認識できない速度で刀を抜き、男を切っただけだけ？

「このアマあ！」

男共は怒り狂い私にそれぞれの武器を構え、襲いかかってくる。怒りに身を任せただけの戦い方じゃあ私に触れることもできないわよ？

私は懷から一つの紙を取り出し……ある言葉を唱えた

「魔神「死狂い」」

そうスベカを唱え私は幻想郷の霊夢が使っている御払い棒を手に持ち、それを何度か振るう。そうすると空間が割るかのように堺が出来て……元に戻る。すると約……100位かしら？それくらいの賊の体がずれ始め落ちる。ちょっと強すぎるかしら？それに味方も巻き込みかねないわね。魔神「死狂い」は極力使わないようにしないといけないわね

「う、うわあああああ！！」

「勝てるわけねええ！？」

あら？これだけで戦意喪失？残念だけど逃がさないわ。私は二本の太刀を鞘から取り出して、逃げまとう賊に向かって駆け出した。一瞬で近づけるのもあれね。まあ、いいわ

私は太刀をそのまま抜刀する。そのひと振りで固まっていた賊の五人を切り裂く。

「く、くそお!？」

逃げられないと悟ったのかしら。相手はそれぞれの武器を構え私に向かってくる。なら次は……

「煉獄「アマテラス」」

別のスペカを唱える。そのスペカが発動すると私の真上に太陽を思わす巨大な火の玉が出現してそこから無数の火の玉が賊を襲う。これも無差別ね。これで200位かしら? なら後は……

「必然「キングクリムゾン」」

本来あるはずの過程をすっ飛ばして結果だけ残すこのスペカ……まあ、本当は時間を止めているのだけれど……これは時間関係の能力を持っている人しか破れないからね。ただ……その能力者でも気づかれることは極稀なんだけどね。まあ、そもそも時間そのものを消し去っているのだけれども

私は時間が止まっている間に残っている賊の全てを切り裂く、そして……時間が動き出す

賊は何が起こったかも分からず……いえ、理解すらできないで死ぬ。うゝん……後、絶望「鮮血の結末」が残ってたんだけど……これまでのスペカの威力を見る限り、このスペカはやめといたほうがいいわね。さてと……これからどうしようかな? この先から賊が来たってことは……この先の村はきつと壊滅してるわね。本当にどうしようかしら? ……あれ? これは……

「生き残りがいる?」

しかもこの気配は……賊が引いていた、多分村から奪ってきたものをいれた荷台から、まさか……

私はその荷台に近づき……中をのぞくと

「……!!」

女の子が一人、縄で縛られていた。どうして……って考えるまでもないわね。とりあえず縄を解かないと……

「大丈夫？」

私は口をふさいでいる布を取る

「あ、あなたは……？」

「私はただの旅人よ」

そう言いながら足に付けてあるナイフをとって縄を斬る

「あ、ありがとうございます。」

「いいのよ。それよりあなたは？」

「は、はい。性が徐、名が晃、字が公明で、真名は灯里あかりです。」

「真名まで……いいのかしら？」

「はい。あなたは私を助けてくれました。もしあなたに助けていただけませんでしたら……」

もし、私が助けなかった後のことを考えて顔を下に下げる灯里……
…全く

「そついうのは考えない。助かったんだからそれでいいじゃない」
「は、はい……それで、あなたは……」

そつ言えば、まだ名前を言っ てなかつ たわね

「性が博、名が麗、字は真名と一緒に霊夢よ」
「博麗霊夢様…… 霊夢様！私を連れつててください！」

いや、様とか付けられるのはちょっと……

「いや、様は付けなくてもいいんだけど……」
「それはなりません。私は霊夢様に命を救つていただいた者です。
救つていただいた霊夢様を呼び捨てにするなど……」

はあ……この子は頑固ね。仕方ないかな……

「はあ……それで、私に付いてきたいといったわね？」
「はい」

真剣な眼差しで私を見る灯里

「いいの？私と一緒にくるってことはまた賊に襲われる可能性があるのよ？」

「それは承知です。私にはもう帰る場所がありません……」

そう言い、灯里はまた目を伏せる。そう、灯里が住んでいた村は賊にやられた……私は灯里の言葉でそれを確信した。ここで一人にしたらきつと賊にさらわれる……それなら

「いいわよ」

「本当ですか!？」

「ええ、だけど私だけで灯里を守れるとは思ってないわ。だから灯里にも自分を守る力を付けてもらっわ」

そう。たとえ私が鬼巫女のスペックに100年間のアテナとの修行(という名のアテナの一部遊び)をしたと言ってもそれは一対一か一对多……誰かを守りながら戦ったことはないわ。だから、灯里には自分の身を守る力を持ってもらうことにした

「それは……霊夢様が私に教えてくださるのですか？」

「ええ、それ以外の誰が教えるの？」

「いえ……わかりました。私頑張らせてもらいます！」

いい目ね……私は立ち上がり灯里の後ろに置いてある荷物の方に向かう

「霊夢様？」

「あなたの村の人には悪いけど、少し食料と後、灯里が使えるような武器を探すわ」

そう言いながら私は袋を開けて中を探る。どれがいいかしら……とりあえずナイフは決定ね。武器を落とされてもナイフを使って殺せるし……ん？

「これは……」

「それは私の村の秘宝です。誰もその剣を鞘から出した人がいないんです」

これは……試してみようかしら

「灯里、これを鞘から出してみなさい」

「え……でも……」

「いいから」

私は手元の剣を灯里に差し出す

「はい……」

灯里はそれを受け取り、剣の柄を持って……引き抜いた

「抜けた……？」

「やっぱり……」

あの剣には少量ながら霊力が籠っていた。それがあの剣が抜けなかった理由。じゃあなんで抜けたって？あの剣の波長と灯里の波長があったのかしら？まあ、どうでもいいわね

「それが灯里。これからあなたの武器よ」

「これが……ですか」

「ええ、そうよ」

「……わかりました。これからよろしくね」

灯里がそう、剣に向かって言うと、剣にまとっていた霊力が灯里に写る。そう、認めたのね

「さあ、灯里。食料とかを纏めるわよ。手伝って」

「はい！」

私たちは食料などを纏める。その作業は大体一時間ほど続き、終わる

「まとめ終わりました!」

「そう……それじゃあ、行くわよ」

「はい!」

私たちはその場を後にして灯里が知っている街のある方に向かう

SIDE 霊夢OUT

SIDE????

霊夢たちが去って一時間ほど経った時……

「これは……」

馬に乗った女性はその場の惨劇を見て、そう口を開いた

女性が見た惨劇とは、体がなんどもきられた死体数百。焼かれた
ような黒焦げの死体数百だった

「姐者……これは」

「ああ……分かっている。」

黒髪を腰位まで伸ばした女性と青髪で右目を隠した女性はそれぞれ言い合い

「……」

その近くにいる金髪の女性はただ無言でその場を見る

そして……

「！？誰だ！」

近くの木から音がし、その場から出てきたのは……さつき霊夢に殺された賊の生き残りだった。

「あんたら……官軍か？」

「そうだと言ったら……」

「頼む！俺の捕まえてくれ！もうあんな奴とは会いたくねえ！」

賊の行った言葉に黒髪の女性と青髪の女性があつとした……それもそうだ賊自ら捕まえてくれと行ってきたのだから

「あなた、この場に起こったことを知ってるわよね？教えなさい」

「あ、ああ。俺たちは何時もどおり村を襲いその帰り道に現れた黒髪で赤色の脇を出した女にあつたんだ。頭はその女に切りかかり……

…地獄が始まったんだ」

「地獄とは？」

「女が武器に手をかざしたと思つたらいつの間にか頭はきられていて……それに激怒した仲間たちがその女に向かっていったんだが……女が変な紙を取り出して何かを口にして手にもつた棒を降つた瞬間……あいつらはいつのか切り刻まれて死んだんだ」

「貴様！私たちをバカにしているのか！」

黒髪の女性は自身の武器を取り出し男に向ける

「ひい！？」

「やめなさい。春蘭」

「しかし華琳様……」

「私の声が聞こえなかったの？」

「い、いえ……」

「ならいいわ。さあ、続きを話さない」

「あ、ああ……俺たちはそのときもう勝てないと思い、盗んだ物を置いてその場から逃げ出したんだ。けどその女は離れた距離を一瞬で詰めてきて俺たちを殺しに来たんだ。俺だけはそのまま逃げたがほかの奴らは立ち向かって……次に見たのが女の頭上に巨大な火の玉が現れて、それが仲間たちを焼き殺していったんだ」

その言葉に大して黒髪の女性……春蘭は何も言わない。なぜならその場に焼きこがれた死体があるからだ。

「その後は……わからねえ」

「何……」

「貴様！ 私たちに嘘を言うのか！」

「本当にしらねえんだ！ 女が三枚目の変な紙を取り出してなにかを口ずさんだと思ったら全員死んでたんだ！」

「貴様！」

「落ち着きなさい！」

「しかし！」

「春蘭！」

「……はい」

春蘭は主である華琳の言葉を聞いて剣を下ろす。華琳……金髪の女性は部下に命じ賊の男を捉えさせ、その場で考え始めた

「……」

「華琳様？ どうかありませんか？」

「秋蘭……あなた、あの占いは覚えているわね？」

華琳は声をかけてきた青髪の女性……秋蘭に前、聞いた占いを覚えてるか問う

「はい。確か『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星。流星は天より御遣いつれて現れ、乱世を鎮静す』でしたか？」

「ええ、でもそれには続きがあるはずよ？『また、黒色の髪こくしよくに赤色あかしよくの着を着た者。この世にあらん術を使い乱世に乱れた世をかける。その者、人の器にあらず』……よ」

華琳は秋蘭の後に続けてその占いの続きを言った

「そうでしたね……まさか」

「ええ、あの賊が言ったこと……まさに占い通りじゃない？」

「確かに……華琳様、もしやして、其の者を？」

「ええ。この世にない術を使う者。それこそ私の覇道にあっているじゃない。秋蘭。ここから近い町か村はある？」

「はい。私たちが来た道にはそのような人物が見当たらなかったと考えると、ここから五日ほどのところにあります」

「そう……それじゃあ、これから私たちはその町に向かうわ！」

「は！」

これが覇道を進む曹孟徳とこの世界に転生した博麗霊夢との出会いに序章になるのだった……

SIDE???OUT

第一話 出会い（後書き）

ユ：作者であるユタと

霊：この小説の主人公の博麗霊夢による

ユ：あとがきコーナー！……っておい霊夢。なんで言わない

霊：面倒だからよ

ユ：たく……つか本当に元男？

霊：元男ってどうゆう意味かしら？

ユ：だってさ、その口調からし（ドス）……

霊：私はこんな口調だけど性別はれっきとした男よ？（刀をスレスレで差し込んで笑顔で言う）

ユ：は、はい……

霊：わかればいいのよ

ユ：……（怖い……さすが鬼巫女、そして短気）

霊：何か言ったかしら？

ユ：イイエナニモ

霊：なんでカタコトよ……まあ、いいわ。それで次の更新はいつになるの？

ユ：そうだな……今から寝るから……もしこのあと書いたとしたら大体更新できて夕方か明日の明け方だな

霊：もう少し早く寝なさい

ユ：いいだろ。ではまた次回

第二話 魏へ（前書き）

お待たせしました。そしていろいろと期待していた方。すみません！
そして最後……あれってどうだろうな？って感じです……まじでど
うなんだろう……

第二話 魏へ

SIDE 霊夢

私は灯里と一緒に町に向かうようになって二日くらいが経ったかしら？ 灯里には朝にはナイフの使い方。夜には剣の使い方を教えている。それで灯里がナイフをしまうところは……なぜか私と同じナイフホルダーを欲しがっていたわね。理由を聞いたなら

「えっと……少しは霊夢様と同じとこがあったいなと思いました」

その時の顔と行ったら……ねえ？ 顔を赤くして可愛かったわよ。一応予備として四個ほど持っていたから二つ渡したわ。まあ、アテナが作ったものだから壊れないでしょうけど……

あ、そう言えばまだ私が男って言ってなかったわね……町に付いてからでいいかな

それで今は何をやってるかというところ……

「これで終わりかしら？」

刀についた血を振るい落とし、鞘にしまう

賊にまた襲われたからかいりうちにしただけ、そう言えば灯里は

……

「あ……灯里、大丈夫？」

木の幹で吐いている灯里を見つけて近づき、背中をさする

よく見ると、灯里のそばにはひとりの賊の死体と血のついた灯里の剣……初めて人を殺したのね

「れ、霊夢様……」

「無理に喋らなくていいわよ。それで感じているわよね？」

「はい……これが人を殺すと言うことですね」

「ええ……人を殺すことには慣れないで、慣れたら人ではなくなるわ」

「はい……」

この時代、人を殺すなどとは言えない。でも人を殺すことには慣れてはいけない。矛盾しているように聞こえるけど、慣れたら人ではなくなる。それはただの獣よ

「それじゃあ、少し休憩したら町に向かうわよ」

「はい……ありがとうございます」

「いいのよ。だから今はゆっくり休みなさい」

そう言いながら灯里の頭を膝に乗せる。まあ、膝枕の状態ね

「れ、霊夢様！？」

「何かしら？」

「わ、私のためにその……」

「いいのよ。だからゆっくり休みなさい」

「……はい。では、お言葉に甘えさせてもらいます」

そう言い灯里は目を閉じて……暫くすると吐息が聞こえてきた。寝顔も可愛いわね。さて、私も少し眠るとしますか。大体……一時

間位ねればいいかな？

SIDE 霊夢OUT

SIDE 灯里

ん……そういえば初めて人を殺して……その後、霊夢様に膝枕を
してもらって……

「あら？起きた？」

「あ、はい。おはようございます。霊夢様」

「今はおはようって時間なのか微妙なんだけどね……それより、気
分はどうかしら？」

「はい。大丈夫です」

「そう、ならそろそろ行きましょうか」

「はい！」

私は霊夢様の後をついて行った

SIDE 灯里OUT

SIDE 霊夢

灯里が初めて人を殺してからさらに三日ほどたってやっと町に付
くことが出来た

「ふう……結構距離があつたわね」

「はい。でも、食料が持つてよかったですね」

そう。二人で持てる食料の数は限られている。もう少しで尽きる

とこだったわ。私は食べなくても餓死はしないけれど灯里は普通の人間だから餓死するわ。

「まず、何か食べましょうか」

「はい。私もう限界でしたので……」

そう言えば、もう昼過ぎだったわね……

私たちは街に入りとりあえず散策をすることにした。どんな店があるかわからないからね

「あ……」

「?どうしたの?」

「いえ……」

灯里が見ている先に視線を向けるとそこには中華料理屋があった。全く……遠慮しなくてもいいのにね

「灯里、あそこで昼を済ましましょう」

「え……」

「あなたは遠慮しすぎよ。それじゃあ行くわよ」

「あ、はい!」

私たちは店のなかに入った……へえ、内装は未来の中華料理屋とそう変わらないのね。それにメニューも……

「私はラーメンにするけど灯里は何がいい?」

「それでは、私も霊夢様と同じで」

「わかったわ。すみません。ラーメン二つお願い」

「毎度あり!」

そう言えばラーメンを食べるのって久しぶりね。

暫くしてラーメンが運ばれてきた

「（ずるずる）……結構美味しいわね」
「美味しいです！」

この時代って確か香辛料とかあまりなかったわよね？それでも、これだけ美味しいっていいわね……それから少したってから食べ終わって、お金を払ってからそこから出て……

「見つけたわよ」

金色の髪をツインテールだったかしら？その髪型にした少女？に声をかけられた

「何かしら？」
「……」

本当になんのようなのよ。

「あなた、名前は」
「自分の名前は言わずに相手の名前を聞くのねえ……それが礼儀かしら？」

「貴様！」
「待ちなさい春蘭！」
「か、華琳様」

なにかしらね？これは

「失礼したわ。性は曹、名は操、字は孟徳よ。ほら、あなたたちも」
「く……華琳様の命令だから仕方なくだからな！性は夏侯、名は惇、字は元讓だ！」

「姐者……言い方というものが……性は夏侯、名は淵、字は妙才だ。よろしく頼む」

「私は性が博、名は麗、字は真名と同じだから教えないわ」

「わ、私は性が徐、名が晃、字が公明です！」

それぞれ自己紹介？自己紹介でいいわね。をした。へえ……この子が曹操ね

「字と真名が一緒ね……」

「ええ、私の地方はそうよ。それで私になんの用よ？」

まあ、曹操の考えていることは大体わかるけどね。

「ええ、あなた。私たちと……」

「ぞ、賊だあ！？」

「「「「「！？」」「」「」」

「こんな時に……」

全くよね

「灯里！」

「はい！」

私は灯里に声をかけて賊がいる方に走り出す

「ま、待ちなさい！秋蘭！あなたは兵たちに伝えて！春蘭は私と一

緒に行くわよ！」

「はい！！」

曹操は夏侯惇と夏侯淵にそれぞれ指示を出してから私たちを追いかけてきた。その辺の指示は的確ね

私は曹操の行動を考えながら走り……そして賊が目の前に見える場所についた

「数は……ざつと500位ですね」

「ええ。」

何か良く賊に襲われている気がするのだけでも……気のせいかしら？

「さて……灯里。私に取り残したものはあなたがお願い」

「はい」

「まて！まさか貴様。あの数を一人で相手するのか！？」

「ええ、それについてに私の実力がわかるわよ」

「あなた……きずいていたのね」

「まあね」

さて……今回はスペカはどうしようかしら？まあ、使わずに勝てそうだしいいわね

「それじゃあ、灯里。よろしくね」

「はい！」

そう灯里に言ってから足に靈力を込めて……地面を蹴った

「「!?!」」

灯里には何度か見せているから驚かなかったけど、夏侯惇と曹操は驚いているわね。まあ、一瞬で賊との距離を半分くらいまで詰めれば驚くわね

「なんだあ、この女」

「あなたたち、今すぐ引き返すなら、命だけは助けてあげるわよ」

一応最初に忠告をする。まあ、これで引く賊なんて居ないと思うけど……

「へ、そんなもん聞くわけねえだろ!」

「そう……ならあなたたちはここで死になさい」

「女一人で何ができるってんだよ!」

先頭の大柄の男が斧を手に私に向かってくる

「遅いわね……」

私はそう言い、刀を抜き、男を切り払う

「てめえ!」

「お前らやつちまうぞ!」

「「「おう!?!」」」

暑苦しいわね……私、こついの嫌いなんだけど……

「さあ……あなたたちは私を楽しませてくれるのかしら?」

そう言い、私は両方の刀を構えて賊の集団に向かう

SIDE 霊夢OUT

SIDE 華琳

私は最初、あの子が何を言っているかわからなかったわ。賊の数は見た感じ約500……それを一人で相手しようとするなんて、それに私があの子を引き込みもうとしているのもわかってた。ふふ……この曹孟徳が出し抜かれるなんてね

「華琳様！兵たちを連れてきました！」

「秋蘭。いいところで来たわね。あれを見てみなさい」

「……な！？」

秋蘭も驚いているわね。それもそうね。さっきの博麗が一人で500の数の賊と戦っているんだもの

断然、欲しくなったわ。あの子が……

それから暫く経って、半数位の賊を博麗が倒し終わったら残った賊たちは逃げていくようね。

でもね……

「今だ！全軍がかかれえ！」

「「「「おおー！！！！」「」「」

そこにちょうど移動して待機していた春蘭が逃げまとう賊に向かっていく

それを見たあの子も武器をしまつてこっちに戻つて来るわ。さて……どうやって引き入れようかしら……

SIDE華琳OUT

SIDE靈夢

んん……久しぶりにまともに動いた感じがするわね。数日前のは、スベカ使つてすぐ終わつちやつたからね。さて……と

「それで、どうだったかしら？」

「ええ、あの占いの人の器ではあらずつてことを改めて思い知つたわ」

占いつてなによ。まあ、いいや

「けれど、私にどうして欲しいの？」

「あら？私がしたいこと……分かつてるわはずよね？」

「一応ね。でも、あなたの口から聞きたいのよ」

「それじゃあ、言わせてもらつわ。博麗。私の元に入りなさい」

お願いじゃなくて命令系なのね……でも

「いいわよ」

「あら、そんな簡単に決めるのね」

「ええ。あなたと一緒にいたら楽しめそうだしね。改めて言つわ、性は博、名は麗、字と真名は一緒に靈夢よ」

「なら私も名乗らないとね。私は性は曹、名は操、字は孟徳、真名は華琳よ」

「私は性は夏侯、名は惇、字は元讓、真名が春蘭だ！霊夢！今度私と一戦交えてくれ！」

「姐者……私は性は夏侯、名は淵、字は妙才、真名が秋蘭だ。」

「私は性が徐、名が晃、字が公明、真名が灯里です！よろしくおねがいします！」

「ええ、これからよろしく頼むわよ。霊夢に灯里」

「ええ、あなたの期待に添えられるように頑張らせてもらっわ」

私がそう言い、微笑むと……華琳がほほを赤めて顔を下げる。あれ？まさか……ね？あ、それと、言い忘れてたことがあったわ

「言い忘れていたんだけど私、男だから」

「え、えーーーーー！！！？（な、何ーーーーー！！！？）」

「これは……」

「へえ……」

あら？意外と華琳と秋蘭は普通の反応ね

第二話 魏へ（後書き）

あとがきは眠いからなし！

第三話 闘い

SIDE 霊夢

私が華琳の軍に入って陳留に戻ってから約半月位たった頃……な
んでこんなことになったのかしら？

「さあ、霊夢！武器を抜け！」

なんでまた春蘭と戦わないといけないのよ……

「ねえ。拒否権は……」

「そんなものない！」

ですよ……

「ほら、あなたたち、早く始めなさい」

華琳も見えてないで止めてよ……はあ、仕方ないわね……

こうなった華琳や春蘭は止められない。今までもそうだったしね
……私は諦めて私の武器『蒼月』と『炎月』を鞘から抜く、名前の
由来？アテナがその刀身の色、蒼色と橙色からとった。それだけよ

私が構えたのを見ると春蘭も自身武器、七星餓狼しちせいがろうを構える

「……………」

暫く構えたまま動かず……最初に動いたのは……

「……はあああ!!」

春蘭からだった。春蘭は私との距離を一気につめ、七星餓狼を振り下ろす

私はそれを前方で蒼刃と炎刃を交差して受け止める。く……さすがは春蘭。一撃が重たいわね。私はそのままの体制で体を横にずらし、それに伴い炎月を引き、蒼月で受け止めている七星餓狼を受け流す。そのまま勢いに任せて炎月を春蘭に向けて振るう

「く……」

春蘭はそれを素早く戻した七星餓狼で受け止める。さすが……でもね。

私は蒼月を下から切り上げる。春蘭はそれを後ろに飛ぶことで回避する。でも……

私は炎月を素早く地面に刺し、ナイフホルダーからナイフを三本取り出し、春蘭に投げる。そして、炎月を引き抜き、春蘭に向かって走り出す。

「これくらい!」

春蘭は投げたナイフの内二本を回避して一本を七星餓狼でいなし、そのまま私に切りかかってきた

「!?!」

私は今まで戦ってきた中でしてこなかった行動に驚き、春蘭につこむのをやめて後ろに下がる……少し左頬から痛みを感じ触れると……少しくられたようで血が出ていた

「よし！初めて霊夢に触れた！」

へえ……一対一で私に傷を付けたのは春蘭、あなたが初めてよ？お礼に少しだけ……本気になってあげるわ

SIDE 霊夢OUT

SIDE 春蘭

「よし！初めて霊夢に触れた！」

この半月、何でも霊夢に戦いを挑んで初めて霊夢に傷を付けられたぞ！それにしても、あの占いの人の器にあらずとは本当のことだったのだな。あの時の戦いでも霊夢には傷一つ見られなかった……これは私が霊夢に傷を負わせたの初めてでわないのか！

私がそこまで考えていると

「！？」

霊夢の雰囲気急に変わった。私が警戒して七星餓狼を構えた瞬間……

「な！？」

霊夢の姿が一瞬で私の目の前まで来ていた。何が起こった！？

霊夢はそのまま長さの違う剣で私に打ち込んでくる。私はそれを七星餓狼で受け止めてはいるが、一撃が重い……く……片手でこれほどの威力とは……思いもしなかったぞ！

上下左右から襲いかかってくる二本の剣……ならば！

私は下からくる斬撃を横にずれることで交わし……

「はぁぁ！」

七星餓狼を横から薙ぎ払う！どうだ！

「な……」

だが、霊夢はいつの間にか私の目の前から消えていて……

「これで終わりよ……」

七星餓狼の上に立っていて、私の首に蒼色の剣、蒼月を当てていた

SIDE 春蘭OUT

SIDE 霊夢

私は春蘭の七星餓狼から降りてナイフを拾い、華琳の元に向かう

「ふう……疲れた」

「そのようには見えないわよ」

あら、そう？

「見えなくても、私は疲れているのよ。席、いいかしら？」

「ええ。いいわよ」

一応、華琳から許可をとってから向かい側の席に座る。その隣には秋蘭と今、こっちに来た春蘭が座る

その後、華琳たちと少し話をしてから私は自分の隊の元に向かう。え？隊を持っていたのかって？ええ、今は300人位だけだね。因みに副隊長は灯里が務めているわ。あれ？誰に説明してるのかしら……まあ、いいわ

「灯里、そっちはどうかしら？」

「あ！霊夢様。今しがた走り込みが終わったところです」

「そう。わかったわ。確かこのあとは二人一組での模擬戦だったわよね？」

「はい」

「そう……なら、灯里。久しぶりに私とやるわよ」

「わかりました！」

こうやって、灯里とはたまに模擬戦もする。灯里はあの頃とは見違えるように剣の扱いが上手くなってきた。

「はあ！」

「まだまだよ」

灯里の一撃を蒼刃で受け止め炎月で受け止める。そして蒼月で切りかかるけど、灯里は後ろに下がり交わし、ナイフを三本投げってくる

私はそれを蒼月と炎月で落として灯里に近づくと、灯里も私に向かってくる

私と灯里の模擬戦は大体一刻位やって終わったわ。さすがに一日に二戦は少しあれね。

そして夜

「ん……久しぶりに靈力使って戦ったから少し疲れたわね」

一応毎日靈力の制御は怠ってないんだけどね……今度賊退治が入ったら暴れようかしら？まあ、いいや。もう寝よう。御休み。

第三話 闘い（後書き）

ユ：やってきましたあとがきコーナー！

霊：別にまつてないと思うわよ

ユ：そこ、適切なツツコミをしない

霊：適切……なのかしら？

ユ：多分な。さて……そろそろ霊夢と灯里の設定書いたほうがいいかな？

霊：オリキャラこれ以上出す予定ないでしょ？

ユ：多分な。ま、眠いから寝る

霊：さっさと寝なさい

第四話 覚醒。 霊夢の新たな能力。そして……（前書き）

今回は龍賀様の作品「テンプレな転生 強き信念持ちし者」との
コラボです

一応、本編も入ってますので題名は第四話とさせていただきます

第四話 覚醒。霊夢の新たな能力。そして……

SIDE 霊夢

ふわぁ……アテナ……一体こんな夜中になんのようがあるのよ……

私は昼間にアテナから念話で夜、近くの森までくるように言われた、理由を聞いたらその時になったらわかるって言われたから、一応、来ては見てみたものの……

「ねえ……アテナ」

「何？」

「一体何時になったら、私をここに呼んだ理由がわかるのよ……」

「うーん……もう少しだと思っただけだなぁ？」

なによそれ……帰ろっかな？

「あ、来たみたいね」

私は目の前にいきなり現れた魔方阵を見て刀に手を添える……けど、アテナが何も警戒してないことから私も刀から手をどかす

そして魔方阵が光だし、光が収まるとそこには赤紫の髪を腰まで伸ばした……雰囲気からして男ね。もう一人は……髪の色は金色で瞳の色は赤と青のオッドアイの……こっちも男ね

「遅いわよ。優」

アテナが行った名前……優……ね

「悪かったな。龍斗がなかなか起きなかつたんだよ」

「そりゃ、こんな夜中に起こされても起きるかよ」

「吸血鬼は夜が本来の時間だぞ？」

「それは普通の吸血鬼の場合だろ？」

何か……話が見えてこないんだけど……

「ねえ。あなたたちは……誰？」

「ああ、悪い悪い。俺は哭堵優……一応立場上アテナの上司にあたるか？それと男だ」

へえ……じゃあ、優も神なのね。それとやっぱ男だったのね

「で、そっちの金髪は？」

「俺は森龍斗……ただの転生者……つてどこか？後俺も男だ」

転生者……ねえ……つてなんでこんな男の娘率高いの？……ま、いいか

『私はマスターのデバイスのブラッティ・クロスです。クロスと呼んでください』

デバイスってなんだったつけ？……ま、いいか

「そついう、あんたは？見た目は霊夢だが……」

「そう……ね。私も転生者よ。前世の名前は完全に忘れてるから今は博麗霊夢を名乗っているわ。それと、一応男よ」
「……………」

何かしら、その目は？

「……なんで女口調なんだ？」

「さあ？意識しても治らないから諦めているだけよ」

「……（諦めていいことなのか？）」

何かね……こいつの考えていることが少し分かったわ……

「まあ、それは置いていて」

「（置いていいものなのか……微妙だな）」

「私たちをここに読んだ理由はなにかしら、アテナ？」

「ああ、それは俺も気になってたところだ、優。そろそろ理由を話してもいいんじゃないか？」

あら？龍斗も聞いていなかったのね

「そうねえ……」

「そう言えば言っ てなかったな。お前たちをここに呼んだのわ……」

呼んだのわ？

「「あなた（お前）を龍斗（霊夢）と戦わせるためよ（だ）」」

「「は？」」

意味がわからないんだけど……

「ま、本来の目的はアテナに聞いてくれ」

「アテナ……なんでかしら？」

「最近あなた、少し機嫌がわるかったじゃない？」

まあ……最近は少し苛立ったりすることがなかったわけじゃない

けど……

「少し考えてみたんだけど。霊夢、こつちの世界に来てからまともに戦えてないわよね？」

アテナに言われたことはたしかにそうだ。最近では賊が出てきているけど、それは烏合の衆。齒ごたえが全くないわ

「それで、少し欲求不満気味だから、優に頼んでみたのよ」
「で、それに適任は結構いるが……ま、そこは省くとして」

省かないでよ

「最近龍斗の戦い方を見ていなかったのもあるから龍斗を連れてきた。ま、ほとんどその場の気分だが」

「気分で俺の安眠は妨害されたのか……」

「ご愁傷さま……と、だけ言わせてもらっわ

「それじゃ、とりあえず俺らは離れとくか」

「そうね。あ、いくらでも壊してOKだからね」音はある一定の距離以降は聞こえないようにしてるし」

用意周到ね……絶対に断らせる気がなかったわね

「はあ……やるしかないのか……」

「諦めなさい。アテナがああなったら止められないのよ」

あの時もそうだったわねえ……

「そうだな……クロス、モード刀&ナイフ」
『了解です』

龍斗は右手に現れるナイフと刀……ああ、そう言えばデバイスってそういう役目があったわね

どうでもいいことを考えながら鞘から蒼月と炎月を取り出し構える

そして……

「「……」」

最初に動き出したのは……今回は私からだ。最初は様子見の方がいいけど……それは、相手も同じことを考えているはず……だから、私から動いた

「はああー!!」

「くっ……」

私の初手を刀で受け止める……結構力込めたはずなんだけどね

……

「初手からこの威力かよ……」

「出し惜しみはしない……そうでしょ？」

ま、少し出し惜しみはしてるけどね

「そうだな……クロスモード解除だ」
『はい』

龍斗は出現させた刀とナイフを消し去り……

クラウン・クラウン
―神ノ道化発動―

右手を変な風に変えた。何か見た覚えあるけど……ま、いいわ

クラウン・エッジ
―爪ノ王輪―

爪の先にリング状の物が出てそこから鞭みたいに何かが私に迫る

「久しぶりに使ってみようかしら……夢符「二重結界」」

私の周りに二つの結界が現れる。龍斗から放たれた鞭は二つ目の結界を破壊するけど二つ目の結界を破壊することはできなかった

「やっぱりスペカは使えるのか……」

「ええ、あたり前じゃない？さて……次はこれね。夢符「夢想亜空穴」」

次なるスペカを発動させ、龍斗の後ろに瞬間移動し、蒼月で切りかかる

「チッ！」

それを右手の鋭い爪の部分で受け止める龍斗。忘れてないと思うけど……

「私は二刀流よ！」

私は空いている炎月で龍斗に切りかかる！

「な！？しまっ……！？」

龍斗はきずき後ろに下がるが腕が切り落とされる

「く……」

だけど龍斗の腕はすぐに生えてきた

「へえ……吸小鬼って単語が聞こえてきたからまさかと思っていたけど……不老不死ね」

「ああ、そうだ」

なら……

「本気を出せるわね！霊符「夢想封印」！」

私の周りに七つの弾幕が表れ、それを龍斗に向かって放つ

「く……なら！」

ー火符「アグニシャイン」ー

龍斗の周りに炎の弾幕が現れて、私の夢想封印を全て弾く

「パチュリーのスペカ……」

ここでパチュリーのスペカを使ってくるなんて……まさか

私は一つ思い当たったことがあり、それを試すかのように攻撃す

る。当たって欲しくないんだけどなあ……

「大結界「博麗弾幕結界」！」

私を中心に二つの結界を作る。そして私から無数の弾幕を放つ。それが一つ目の結界に吸い込まれ龍斗の後ろに展開してある結界から出てくる。さあ……これはどう迎え撃つの？私は龍斗を注意深く見る……そして

「禁弾「過去を刻む時計」」

龍斗の周りを回るように現れた弾幕……やっぱり、龍斗は東方の全員のスペカを持っているわね……きつと……これはちよつと厄介ね……こうなると私とおんなじ鬼巫女のスペカをもつてそうね……

「今度はこっちから行かせてもらうぞ！」

「禁忌「フォーオブアカインド」」

龍斗が四人になった。げ……これはまさか……ね

「神槍「スピア・ザ・グングニル」」

「「深弾幕結界 - 夢幻泡影」」

「魔符「スターダストレヴァリエ」」

「火水木金土符「賢者の石」」

やっぱりい！？これはまずい！仕方ないわね……

「必然「キングクリムゾン」！」

過程を消して結果だけを残すわ！私は大体二十秒くらいの時を消した。そして龍斗の分身の三体をナイフを投げて消滅させる

「な！？」

やっぱり驚くわね

「普通の霊夢とは違うと思っていたんだが……まさか鬼巫女か……」

「ええ、鬼巫女12P……それが私に宿っている……いいえ、私自身の力よ！煉獄「アマテラス」！」

「くう……」

「必然「キングクリムゾン」」

「させないわよ！消滅「経緯の小委」！」

「何！？」

消滅「経緯の小委」は昔、私自身と戦わせられたときに造ったオリジナルスペカの一つ。その効果はあらゆる時間に関係する力の強制的解除よ。一応必然「キングクリムゾン」は時間を消し去るスペカ……だけど、これの前には無力よ

「く……なら！」

「煉獄「アマテラス」」

同じスペカで相打ち狙いね……！？

「神槍「スピア・ザ・グングニル」」

「きゃ！」

まさか煉獄「アマテラス」が終わった瞬間に新しいスペ力を発動させて追撃してくるなんてね……直撃は避けれたけど。左手を持っていたかれたわね……

「直撃したと思っただがな……」

「そんな……簡単にはやられないわよ……」

私は左手に靈力を集中させ、新しい左手を構成する。アテナに教えてもらったやり方よ。集中させて数秒後、私の左手は元通りになっていた。再生した左手でなんとか刀を少し振るう。暫く今までどおりに動かすことはできないわね……

「そんなふうに戻れるんだな……」

「ええ、たとえ外傷が飾りでも無くなった腕は飾りじゃないわ。だからこういう事はアテナに教えてもらったのよ」

ま、私しかできないんだけどね

「そんなことより……なんで一々回復するまで待ったのよ？」

「そりゃあ、全力のお前とやり合いたいからな」

そんな理由で？まあ、構わないわね

「さあ……鬪いの再開よ」

SIDE 霊夢OUT

SIDE 華琳

「霊夢ったら……なんであんな苛々してたのよ」

ここ最近、霊夢の様子がおかしかった。普段とあまり大差はないけど……何か機嫌が悪かったような気がする……

だからそれを確かめるためにいま、霊夢の部屋に向かっているのだけど……

「あれは……霊夢？こんな夜中にどこに行くのよ……」

私は夜中、どこかに向かう霊夢の後ろを付けてみる。そして霊夢は近くの森のなかに入っていた

「こんなところにこんな時間……何をするの……霊夢」

私はそのまま霊夢の後をついて行った。そして開けた場所につくと、そこには羽をはやした女性がいた

「（なによあれ！？なんで羽なんて……それに霊夢も全然警戒してない……ふふふ……これは後でたつぷりと聞く必要があるわね……それより、今は……）」

なんで、霊夢がここに來たのか……それを探る方が先ね

暫くすると向かい側が光り出して、そして光が収まるとそこには女性が二人いた

「（今のは何……急に現れたわね……って、また霊夢の知り合い？）」

霊夢たちが女性二人の方に近づいたせいで会話が少ししか聞き取れないけど、名前と性別はなんとか聞き取れた……それに……

「（神って本当に居るみたいね……それにあの男……私に気づいてるわね）」

それでいてわざと放置している……そして暫くして霊夢と金髪の男……龍斗だったかしら？……は距離をとった……この闘いを私に見れと言ってるのかしら？いいわ、見させてもらっわ

そして、その戦いは……私の理解をはるかに超える……人間では決してできない闘いだっただ

「（空を飛ぶ？物凄くありえないけど……今、目の前でやっているから信じるしかないわね……）」

そして暫くして、金髪の男、龍斗は霊夢に腕をきられた

「（これでお仕舞いね。霊夢相手に片手は……って腕が再生した！？）」

もう、意味がわからないわ……次は金髪の男が四人になって三人がいきなり消えた……もう驚かないわよ？

次に霊夢の真上に炎の塊が現れて、男の放も同じ物を出現させ……ぶつかりあった。暫く、その場には煙が立ち上っていた……そして、煙が消えると今度は霊夢の左腕が消えていた。そして光が集まると霊夢の腕は元に戻っていた

「（もう、なんでもありね……）」

「……そろそろ出てきたらどうだ？」

「そうよ。こんな闘い。そこじゃみずらいでしょ？」

……男の方にきずかれているのは分かっていたけど……女の方も分かっていたなんて……私は隠れている場所から離れ、男と女の場所に行く

「それで、あなたたちは一体なにものなの」

「それは、話すといろいろ長くなるな……色々と省くがいいか？」

「ええ。私も手短に済まして欲しいもの」

「そうか……なら、俺らは霊夢を転生させた者たち……とだけ言うておこうか」

「転生？それは何」

「転生は一度死んだ人間を別の世界で生き返らせることよ」

今度は女が答えた

「死んだ……ってことは霊夢は一度死んでるってこと？」

「ああ。そうだ。ま、後は色々とあるが……闘いが再開したからまたの機会にな」

うまく話を変えたわね……でも、この闘いの行く末をみたいのも本心……しかたないわね……私は視線を再び戦いへと向けた

SIDE 華琳OUT

SIDE 霊夢

く……中々近づけないわね……

「夢符「夢想亜空穴」！」

「それはもう見切った！」

一度通じた技は効かないわね……

―「紅色の幻想郷」―

龍斗を中心に周りに放たれる大玉。そして通った後には小玉が残り、バラける。

私は龍斗から離れる。ってかなんで華琳がいるのよ？はあ……後で根掘り葉掘り聞かれるわね……それより今はこっちに集中しないと！

―恋符「マスタースパーク」―

極太の砲撃が放たれた。また面倒な物を！

「煉獄「アマテラス」！はあああ！！」

アマテラスを火玉其の物を砲撃に向かって放つ！これでなんとか迎撃できるって感じね……なら！

「必然「キングクリムゾン」！！」

再び時間を消し去る。龍斗は移動しようとしてたけど……その先に私は向かう。そして腕を切り落とす！

「くう……だが！」

龍斗も残った腕で私の腕を切り落としてきた

そして龍斗から離れる

「はあはあはあ……」

私は腕を再生させる……私の再生は霊力を使う。そして私の霊力は無限じゃない……それに引き換え龍斗の再生は吸血鬼としての力……力は使っていない

「（これは……負けるかしら……）」

『あら？あなたはここで負けを認めるのかしら？』

「（だ、誰！？）」

いきなり、誰かの声が聞こえてきた。龍斗は何も反応を示さないうことは、私にだけ、聞こえる声かしら……

『そんなことより……来ているわよ？』

「！？」

私は謎の声に忠告で迫り来る龍斗の右腕を蒼月で受け止め、炎月で切り返す。

「（それで！あなたは私になんのようがあるのよ！）」
『ふうん……やっぱ気づいてないのね』

何がよ！何が！……っと、危ない……

私は聞こえる声に返答しつつ、龍斗の攻撃を回避する

「宝具「陰陽鬼神玉」！」

薄蒼色の玉を龍斗に向かって放つ！

『はぁ……全く……あの人に頼まれた理由が理解できたわ』

誰に何を頼まれたのよ……

「（それで何？手短に話して頂戴）」

『それじゃあ言うわよ。霊夢。あなた自身の能力に気づいてないよ
うね』

「（は？なによ。私の能力は「あらゆる干渉を否定し我を通す程度
の能力」と「空を飛ぶ程度の能力」の二つでしょ）」

『本当に気づいてないのね……いいわ、気づかせてあげる』

「（何を言ってる……）う……何……これ」

「おい、どうした？」

龍斗が急に頭を抑え始めた私に聞いてくる。でも、今は返答できない。いえ、頭痛が痛すぎて声が出せない

「（何よ……これ……何か……頭の中に）」

これは……文字？

私は意識を頭の中に現れた文字の方に向ける……もう……少し

『……写し取る程度の能力』

もう少し……見えた！

『幻想郷の人物を写し取る程度の能力』

は？何よこれ？

『これはその名前のとおり、私たちの誰か一人を写し取ることができるのよ。それもランダムでね。因みにその人の体の一部を顕現出来たり能力やスペルカードも使えるわよ』

チートよね？

『人それぞれじゃないかしら？それじゃ、私はそろそろ帰るわね。またね』

「（ま、待ちなさい！……行っちゃったわね）」

一体誰だったのかしら……考えても仕方ないわね。私は今、どの能力が使えるか確認する……ふうんあの子の能力ね

私はゆつくりと立ち上がる

「大丈夫か？」

「ええ、心配してくれてありがとう」

「いや、まあ……」

「ふふふ……それじゃあ、闘いを再開しましょうか！」

私は炎月をしまい私は背中に悪魔の翼を生やす。つまりはレミリアのあの翼を顕現させたのよ

「な！？」

驚いた時に出来た隙を逃さず、龍斗に近づき、蒼月で切りかかる。龍斗はそれを右手で受け止める……けどね。私は左手でナイフを取り出し龍斗に切りかかる

「く……」

龍斗はそれを後ろに下がり躲す。逃がさないわよ

私は左手のナイフを龍斗に向かって投げる。さらに……

「神槍「スピア・ザ・グングニル」！！」

紅い槍を出現させ、これも龍斗に向かって投げる。そして「運命を操る程度の能力」を使って、この二つが完全に当たるように運命を弄る

「はあはあはあ……これでどうよ」

神槍「スピア・ザ・グングニル」と「運命を操る程度の能力」を使った急いでで霊力が残りわずかになってしまったわ……これで終わらなかつたら……あれを使っしかない……

私は言葉で龍斗の方を見る。龍斗の周りは砂煙が待っていたけど……それがなくなるとそこには龍斗がいた

「ほとんど無傷って……それに……」

確か能力で必ず命中するようにしたのに……まさか

「まさか……龍斗も東方の能力を……」

「ああ……」

なるほどね……それで私がいじった運命をさらにいじったのね……

「……」

私の残りの霊力じゃあ、スペカー一枚発動させるのが限界……なら

……

私は一枚のスペカを取り出す。それは禍々しい模様が書かれている。そしてこれは……私の持っているスペカの中で最も強力で……最も凶悪なスペルカード……

「必然……」

龍斗が何かに気づき、私に近づこうと足元に力を集める。けどね

……

「「ゼロ……」

これの前では、如何なる力も行動も……

「キングクリムゾン」！」

無意味よ

龍斗はその場で体中に傷が出来て、そこから血が流れる。そして両肩には私のナイフを刺さっていた

「何を……した……」

「ただ、私の持っているスペカの中で強力で凶悪なスペカを発動さ

せただけ……そのスペカは必然「ゼロ・キングクリムゾン」」

必然「ゼロ・キングクリムゾン」……それがそのスペカの名前……

「必然「ゼロ……キングクリムゾン」……」

「ええ、これは必然「キングクリムゾン」みたいに時間を消し去るスペカじゃない……これは必然「キングクリムゾン」を発動させた際に起こる未来を持ってきただけ……」

「なんだよ……それ……勝てるわけ……ないだろ」

そうね……でも

「これ……結構反動でかいのよ……くう！」

私の左腕に幾つもの裂傷ができる。これを使ったら体のどこかに裂傷が出来るからあまり使用したくないのよ……でも、威力は強いから、本当にまずい闘いにしか使用しないけど……

「霊夢!？」

華琳が私に近づいてきて倒れそうな私を支える

「ちょっと大丈夫なの!」

「ええ、大丈夫よ……こんなのすぐ治るわ」

「すぐって……え？」

私は残った僅かな霊力を全て左腕の治療に回す。全快は無理そうね……でも、少しは楽になるわ

「傷の治りが……早い」

「今は、これくらいが限界だけだね」
「どうだった？」

アテナが近づき、聞いてくる。

「ええ、満足よ……でも、あなた、私に能力があるって気づいてたでしょ」

「ええ。あなたは霊夢の能力しかもっていなかったし、変な感じがしてたからね」

「霊夢は私……あの能力も自分のよ」

「ふふ……そうね。それじゃあ、私は帰るわね」

「ええ。」

アテナは優と龍斗……傷は治っている。さすが吸血鬼……と一緒にどこかに転移した。さて、後は……

「華琳……話はするからその前に横にならして」

「……ええ。わかったわ」

「ありがと……」

華琳はすぐ近くの木に近づき、それを背もたれとして座り、私の頭を膝の上に……膝？

「か、華琳！？」

「何？」

「あ、あなた、この体制は！」

「あら？私がしたいの。悪い？」

「そ、そんなわけないけど……」

こっちが恥ずかしいのよ……ああー、絶対に顔、紅いって私……

「それじゃあ、話して貰うわよ。霊夢のこと、全て」
「わかってるわ……」

それから私はここにきた経緯をすべて離した。転生したこと。昔の名前が分からずに博麗霊夢を名乗っていること。この体のこと。そして……何故私が転生したのかを……

「……」

「これが私の全てよ……どうだった？私が怖くなった？」

「……なわけ」

「？」

「そんなわけないわよ！」

「……華琳」

この反応は正直、予想外だったわ

「それで……どうなったのよ」

「何が？」

「あなたを殺した神よ！」

ああ……そのことね

「神の位を剥奪されて人間に転生したらしいわよ」

「そう……」

華琳が少し震えてるのがわかる。そして、視線を右手に向ける。華琳の右手は力いっぱい握られていて、爪が食い込んだのか血が出ている。私はそんな華琳の手を……右手で触れた

「れい……む？」

「全く……華琳は綺麗なんだから、こんなことしない」
「き、綺麗って……」

そこでなんで照れるのよ？まあ、いいわ……霊力を使い切っちゃったから眠気がやばいわね……

「華琳……」

「次は何よ」

「物凄く眠いから……後、よろしくね」

「……ええ。わかったわ」

「そつ……御休み……華琳」

「ええ。御休み。霊夢」

私は華琳の笑顔を最後に見て、意識を落とした

SIDE 霊夢

SIDE 華琳

全く……無茶ばっかして……

「……」

私は霊夢の左腕を見る。そこにはさっきまで夥しい量の血が流れた裂傷があったけど……今では血が止まっている

「次から……無茶したら、怒るから」

聞こえているはずないけど、私は言う。そして気づく、私が何故、

霊夢に対してこれほど心配しているかにそれは……私が霊夢のことを好いているから……まさか私が男を好きになるなんてね……私は霊夢の顔を見つめる……そして……

「霊夢……」

霊夢の頬にキスをする

「ふふ……こっちは、あなたが目覚めている時、そして、私の気持を伝えた時にとっておくわ。私に好かれたこと……後悔はさせないわよ」

今はまだ伝えられない……伝えたら、私の覇道の道が揺れるかもしれないから……だから、今は……

「ゆっくり、休みなさい……」

私はその後、霊夢の寝顔を見ていた。そして霊夢を霊夢の自室に運び、ベットに寝かした後、私も自室に戻って眠った

SIDE 華琳OUT

SIDE 霊夢

うつ……ここは？

私は、私が私になったときと同じような白色の空間にいた。そして目の前には……

「あら？起きたのね」

八雲紫がいた

「……」

「……なにかしら？」

「……絶望「鮮血の結末」」

「い、いきなり！」

紫はその場の空間をいじり、スキマを作ってその中に入って私の絶望「鮮血の結末」を交わした

「チツ……」

「いきなり、それは無しじゃない？」

「そう？」

「……この話題はここで終わりにしましょ。だからそのスペカをしまつて頂戴！」

私は取り出したスペカ必然「ゼロ・キングクリムゾン」をしまう

「それで、私になんの用よ」

つまらない用事だったら必然「キングクリムゾン」を使ってあげるわ

「物騒な考えはやめて……」

こいつも読心術を使えたんだ……

「まあ、いいわ。あなた、ここがどんな世界かわかってる？」

「ええ、大体わね。ここは夢の世界……でしょ？」

「ええ、正解よ」

やっぱりね、私はあのあと寝たしもし体事この空間にいたら左腕に治りきっていない裂傷があるはずだしね

「それより、これを見てみなさい」

「？何よ一体……」

私は、紫が開いたスキマを除く、その先には眠っている私と華琳の姿が……現実世界ね

『……私に好かれたこと……後悔はさせないわよ』

はい？今なんて言った……？好き？華琳が私を？

「ふふふ……随分好かれているじゃない」

こいつ、絶対にわかってて見せたわね。笑いをこらえてるのバレよ

「煉獄「アマ」」

「ま、待ちなさい！笑ったことは謝るからスペカを発動させないで！」

……仕方ないわね……

「それで、どうするの？」

「……今すぐは無理よ……」

そんなすぐに決めれないわ……こんな重要なこと

「そう……それじゃあ、本題に入らせてもらっわ」

そう言えば、本題を聞いていなかったわね

「あなたの新しい能力のことよ」

新しい能力っていったら……『幻想郷の人物を写し取る程度の能力』のことね

「その能力の効果は……わかってるわね？」

「ええ……実際に使ってたじゃない」

「ええ、私があなただけを呼んだのはもう少し詳しく説明するためよ」

詳しく？

「ええ。その能力で使える能力が変わるのは毎朝の7時。後は……」

まあ、概ねさっきの会話で教えたくらいね

「それだけ？」

「ええ、これだけよ。ああ、それと」

それと……何よ

「この世界の博麗霊夢。がんばりなさい」

「言われなくとも頑張るわよ」

「ふふ……そうね。それじゃあ、またね」

「ええ、わかってるわよ」

紫はスキマを開いてその中に入って行って、私も意識がなくなる

SIDE 靈夢OUT

SIDE 紫

「ふう……」

それにしても怖かったわね……あんなスペカ、受けたら私が死ぬわね……

それにしてもあの靈夢の能力……『幻想郷の人物を写し取る程度の能力』……結構恐ろしいわね……まあ、いいわね。楽しそうだし♪

たまには様子見に行こうかな？

「よう、紫」

「あら、やっぱり来たのね」

私のスキマの中に入り込んできた人物……哭堵優

「ああ。で、どうだった？」

「私に聴かなくても、概ねわかるわよね？」

「ああ、そうだな。」

からかってるのかしら？

「それでは、私はこれで失礼させてもらっわ」

「なんだよ。酒を持ってきたのにな」

私はその言葉に反応する……

「それじゃあ、一緒に飲むわよ」

「たく……それじゃ、案内よろしく」

「ええ。」

私は月がよく見える場所にスキマを開き、優が持ってきたお酒を飲む。あら、結構美味しいわね

この後、飲みすぎて酔った私を優がマヨヒガまで送ってもらった……アルコールが結構高いわね……あのお酒……

SIDE紫OUT

第四話 覚醒。靈夢の新たな能力。そして……（後書き）

ユ：疲れた〜

霊：まあ、あなたにしては頑張ったわね

ユ：一万字超えなんて初めて書いた気がする

霊：なんでそんなにもかけたのかしら

ユ：さあ？俺にもわからん

霊：それでもものすごき布石を置いたわね……

ユ：ああ……ここでアンケート！

霊：脈拍がなさすぎ……

ユ：いいんだ。ではアンケートの内容は……これ！

「華琳と靈夢はいつごろくつつけるか」

霊：……何よ、これ？

ユ：今迷っている素朴な内容だ。選択しは以下の通り！

1：大体黄巾党終了後にくつつける

2：反董卓連合軍終了後

3：今すぐくつつける！

4：大体最後当たり

ユ：どれにする！

霊：因みに機嫌は？

ユ：3についてはすぐ打ち切ると思っ……

霊：なんで？

ユ：大体数日中に黄巾党に入るから

霊：入れる意味あるの？

ユ：さあ？一応いれた。後1は黄巾党終了まで2は反董卓連合軍が
終わるまでということだ

霊：全部の期限が違うじゃない……

ユ：次回は多分設定を書くと思う！

霊：思っ……次回も楽しみにしていなさい

ユ：期待させるようなこと言っな！

霊夢と灯里の設定

・博麗霊夢

> i 2 9 4 3 1 — 3 7 8 5 <

性、博、名、麗、字と真名は霊夢

身長：大体170前後

体重：40前後と意外と軽い

性格、その他詳細

大体は原作霊夢と同じだが華琳達を仲間として見ている
服装としてはいつも全体紅一色の巫女服を来ており、たまに華琳に頼まれ他の服を着るがそれは滅多にない。理由として本人に聞いてみたところ「100年以上これを着ていたのよ？だからこれが一番落ち着くの」らしい

最近では本気で戦えず苛々するところから若干戦闘狂の疑いがある
性別は男だが女装することその他諸々（女性関係）に抵抗がない。
というかもはや考えが女性…… 霊夢であつたりする……

使用する武器は橙色で普通の刀より少々短めの炎月と蒼色で普通の刀より少々長めの蒼月と両足に計12本のナイフを携帯している
後は霊夢自身のスペカ、オリジナルスペカ、能力で使用可能のスペカを使用するが、この世界でスペカを使う機会がくるかは不明
ここに霊夢が使うオリジナルスペカを少々書いておく

必然「ゼロ・キングクリムゾン」

鬼巫女のスペカ必然「キングクリムゾン」の派生系スペカ。その能力とは、必然「キングクリムゾン」を使用した際に起こる未来をその場に持つてくる反則スペカである。これに対して如何なる力、行動は意味をなさない。だが、その分反動がでかく、体のどこかに必ず裂傷ができる。そのため一撃必殺のスペカと言えるだろう

消滅「経緯の小委」

霊夢が昔自分自身……つまり鬼巫女と戦わされたときに作成したスペカ。その力は如何なる時間に関係する力の強制的解除又は妨害である。これは必然「キングクリムゾン」すら無効にするスペカ。だが使い道は今のところほとんどない

これだけのスペカを紹介したが本編で霊夢がスペカを使うことは滅多にない。なぜなら強すぎるがゆえ、一撃で終わることを霊夢が望まないためである

能力

『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』

そのまま鬼巫女能力である。能力名のとおり、霊夢に対する干渉を全て否定して我を通すことができる。これにより霊夢に対して干渉系の攻撃は効かない

『幻想郷の人物を写し取る程度の能力』

もともとは『空を飛ぶ程度の能力』だったが、霊夢がこの能力に目覚め変化した物だ

能力名のとおり幻想郷に住んでいる人物の能力を写し取ることができるがそれはランダムに來ます。それも決まる時間は毎朝7時にな

っている。ランダムに決まるがその能力は強力で写し取ることから能力やスベカを使うこともできるしその者の体の一部や特徴を顕現することもできる

例：レミリアの悪魔の翼を自分の背中から生やすことができる

徐晃公明 真名：灯里^{あかり}

性：徐

名：晃

時：公明

真名：灯里

身長：130前後

体重：顔を紅くして「秘密です！」と言われさらに霊夢の手元に絶望「鮮血の結末」が見えたため記載することをやめた

容姿

茶髪で後ろ髪は大体肩位で切りそろえられている

服装としては原作の朱里のような服装で上が橙色になっている

性格やその他詳細

正確は真面目で丁重とした言葉使い

最初は朱里や雛里達と同じ水鏡塾に通っていたが朱里達と一緒に旅を始める。ただ、途中ではぐれてしまい今まで村の人達に少しの間住まわせてもらっていたが山賊に襲われて、アジトに連れて行かれる途中に霊夢にその山賊は全員殺され、霊夢に助けられたことから霊夢のことを慕っている

使用武器は剣。霊夢の話によると灯里が使用している剣には霊力が

宿っていたらしく、それが持ち主を選んだそうだ。今剣に宿っている霊力は灯里を守るように薄く体中に覆いかぶさっている状態である。薄いが強度があり、矢程度なら灯里に届くことはない。灯里が霊力の使い方を熟知すれば応用が効く

武器は村の家宝であった剣と霊夢と同じ12本のナイフを使用する

第五話（前書き）

皆さんお久しぶりです！と言っても新作一つ上げてるのでお久しぶりじゃない方もいますが……ようやっと完成しました！一応これ以降はどんどん更新していけそうです。ただ…別作品もあるのでそうどんどん更新は出来るか不安ですが…

第五話

霊夢と龍斗が戦闘を行い、霊夢が霊力を使用しすぎて眠りに入ってから三日が経った日……

「ん……ここは」

霊夢が目を覚まし周りを見ると見慣れた部屋……自分が華琳から与えられている部屋であった

「……」

霊夢は今までのこと……つまりは龍斗との闘いを思い出していた。そして自分がその後どうなったのかも

「はあ……みんなに謝らないといけないわね……それに」

私の能力も話さないかね……そう霊夢は思っていた。

霊夢は、正確な時間は分かっていないが、自分の霊力を使いきり、それを最大まで回復するために寝ていた時間が普段の睡眠時間では足りないとわかっていたからだ。実際には四日立っていたりしている

「それより……着替えようかしら」

霊夢の今、着ている服は寝巻きのままである。そして左腕には包帯が巻かれている。霊力を回復に回してはいたが完全には治っていないかったのである

そして霊夢は普段着ている巫女服を取り出しそれに着替え始める

そして霊夢が服を着替え終わったと同時に……

「霊夢……様？」

扉が開かれ、中に入ってきたのは灯里だった

「灯里？」

霊夢は振り向き、灯里のほうを見ると、灯里の瞳には涙が見えていて……

「霊夢様——！！」

そのまま霊夢に抱きつき、泣き始めた

「……心配かけたわね……灯里」

霊夢はそんな灯里の頭を優しく撫でる

「ぐす……はい。華琳様から霊夢様の事を聞いたときは心配しました」

「そう……」

霊夢はそのまま、灯里が泣き止むまで頭を撫で続けた。
そして時間が経ち灯里も泣き止んだところで……

「灯里、私が寝ている間に何か変わったことはあった？」

「あ、いえ。変わったことはまだありません」

「そう……ありがとう」

霊夢は再び灯里の頭を撫で始める。灯里も嫌ではなく目を細めて、気持ちよさそうにしている

そして霊夢はベットの近くに置いてあった愛刀の蒼月と炎月を腰に納る

その後、霊夢は灯里から華琳達が今、どこにいるかを聞いて、中庭に向かった

「さてと……華琳と秋蘭は大丈夫だと思うけど……春蘭がねえ……」

霊夢はこれから合うであろう三人の女性の事を考えていた。華琳はその場にいたし、秋蘭はまだ頭がきれる。だが春蘭は……

「戦闘馬鹿なのよねえ……」

そう戦闘馬鹿であった

「ま、なるようになれ……ね」

霊夢はそこで考えをやめ、中庭に向かって歩き始めた

そして歩くこと数分……霊夢が中庭につくとそれでは華琳達が丁度休んでいた

「ん？霊夢」

「何！？」

最初に華琳が霊夢の存在に気づき、それに春蘭が反応した

「ええ」

「靈夢！お前が倒れたと聞いて心配したぞ！」

春蘭が近づきながら靈夢にそういう

「心配ありがとうね。春蘭」

靈夢はそんな春蘭に笑顔を礼を返した

「全く……いきなり倒れたと華琳様から聞いたときは驚いたぞ。体は大丈夫か？」

「悪かったわね。秋蘭、体は大丈夫よ」

靈夢は心配してくれている秋蘭に大丈夫と返して空いている席に座る

そして靈夢に追いついた灯里も空いている席に座り、立ち上がった春蘭も元の席に座る

「さて……靈夢、説明してもらっていいか？お前が倒れた理由を」

秋蘭が言った言葉に春蘭と灯里は靈夢を見た

「ええ……じゃあまずは私のことからかしらね」

靈夢は自身の事を灯里達に話した……話した内容は華琳の時と同じだった。そしてそれを話終わった後のみんなの反応も……

「これが私の過去？かしら」

「靈夢様……可哀想です」

「その神とかいう奴許せん！」

「ああ、私も姐者と同意見だ」

「そう……でも、大丈夫よ。さてと……次は私の能力とかかしらね」

霊夢はそう言い、左手に回れている包帯を解いた。包帯の下から見えたのはいたいたしく残っている裂傷の後だった……普通の人物なら一生残りそうな傷跡だが……

「……………」

霊夢は意識を霊力操作と左手に向ける。そして霊夢の左手が光に覆われると左手に残っていた裂傷はなくなっていた

「「「!?!?!」」」

「これが霊力よ。ちよつと特殊な使い方だけだね」

そう言い、霊夢は立ち上がり、席から少し離れた

「（今日の能力は……天狗か、丁度言いわ）」

霊夢が離れた理由は自身の能力「幻想郷の人物を写し取る程度の能力」を使うためであった。そして今回写し取られていたのは射命丸文であった

「それじゃ、行くわよ」

霊夢は能力を使い、文の天狗としての証……二枚の羽を出現させた。だが出現した羽の色は白と黒色だった

「?（黒と白?可笑しいわね……）」

霊夢はもう一度能力で写し取っている人物を確認する。何ども、

だが結果は変わらず射命丸文であった

「（ま、いいか）」

霊夢はテーブルに戻りながらそう結論を出した

「どう？これで分かったわよね。私が人間じゃないって」

霊夢はこれでどんな反応が返ってこようと覚悟していた。だが返ってきた言葉は霊夢の予想と違い……

「霊夢様の羽……あつたかいです……」

「ふむ……確かにあつたかそうだな」

「霊夢！その羽を触らせてくれ！」

霊夢を怖がるようなものではなかった

「あなたたち……怖くないの？」

「これのどこで霊夢を怖がる必要性があるか問いたいな」

「うむ、そうだな」

「そうですよ！霊夢様！」

「そうね。霊夢の力があれば私の霸道への道も一歩近づくわね」

「全く……物好きね」

霊夢はそう言い、翼をしまう

「ああ、それと、あの神とか名乗る男達からあなたへ預かってたものがあつたわ。」

「？」

「秋蘭」

「は、こちらに」

華琳が秋蘭に指示をだし、秋蘭はどこから取り出したのかわからないが一つの服を持っていた。それは霊夢が今着ている巫女服のように紅く……それでも巫女服とはまた違った布が使われていることがわかった

「これは……」

「早速着てみてください」

霊夢は其の服を受け取りそのへんの物陰に隠れてから今着ている巫女服を脱いでから渡された服を着る。その服は脇は出ているものの巫女服より動きやすく腰にはベルトがあり、下はスカートのような服装であつた（東方紅魔城伝説の霊夢の服装を思い浮かべてもらえればいいです。あれをベースにしていますので）そして最後に蒼月と炎月を腰に差し華琳達の元に戻る

「へえ……」

「霊夢様かつこいいです！」

「まあ、あの服装よりは少し動きやすいことは動きやすいわね」

霊夢は少し、その場で動き、動きやすさを確かめた

その後、暫く五人はお茶会（これ以外でなんて説明すればいいかわかりませんでした）を楽しみ、四日ぶりに霊夢は自分の隊に顔出してから自室に戻り眠った

第五話（後書き）

ユ：久しぶりにやってきました、あとがきコーナー！！

霊：うるさいわよ

ユ：いいじゃねえかぁ……結構久しぶりなんだぜ？更新

霊：あんたが書かなかったのが悪い

ユ：く……それを言われると反論できない……

霊：で、大丈夫なの？

ユ：なにが？

霊：更新

ユ：大丈夫だ！別作品もあるが今週中にもう一話投稿したい！

霊：したいなんだ

ユ：ああ、それで読者に聞きたいのですが……本郷一刀って黄巾堂
変前には恋姫の世界にいますか？

霊：何よその質問

ユ：原作未プレイヤーからの素朴なる疑問だ！

第六話 調査（前書き）

今回新しく出てきた張？こと里奈の設定は後日霊夢と灯里の設定の題名を変えた【主人公及びオリキャラ設定】集を割り込み投稿で一番最初に投稿させていただきます。それに伴い【霊夢と灯里の設定】を削除します

第六話 調査

SIDE 霊夢

「灯里い……まだ終わらないのぉ」

「まだまだです。」

もう……何よ、この書類の量……

私の目の前には一つの書類の山が出来ていた、その横には一度目を通した書類の山が二つ位ある

ここ数日、書類仕事ばっかさせられている。ええ、わかってるわ、軍師不足で武官である私達にもこう言うのが回ってくるくらい……約一名は役不足だけど……

「はぁ……もう三日は体をまともに動かしてないわねえ……」

「私もそうですよ」

霊力の操作は普段からやってるからいいけど……いい加減思いつきり暴れたいわ

「れ、霊夢様!？」

「え? あ、しまった……」

どうやら無意識の内に手に力を込めていたらしく灯里が注意してくれなかったら紙が破れるところだったわ

「ありがと、灯里」

「いえ」

はあ……こうなったらアテナに頼んでまた別世界から一人連れてきてもらおうかしら……

私はそんなことを考えつつ目の前の書類を片付けていく、そして半分位が終わったところでドアが開く

「霊夢、失礼する」

入ってきたのは秋蘭だった

「どうしたのよ、秋蘭」

「華琳様と呼んでいる」

「華琳が？」

華琳がこんな時期に私を呼ぶなんてね……そう言えば最近、賊が結構増えてきてるわね……それと関係あるのかしら？ま、行ってみれば分かることね

「灯里、ある程度終わったなら適度に休みなさい」

「はい」

灯里はこうでも言っとかないと休まないからね。真面目なのはいいけど限度というものを知ってもらいたいわ。そう思いながら私は華琳の部屋に向かう

「華琳、入るわよ」

私は一言断ってから華琳の部屋に入る

「あら、霊夢。早かったわね」

「ええ、それでなんのよう？」

「慌てないで、これを見て頂戴」
「？」

私は華琳から一枚の紙を渡され一通り目を通した

「ふうん……義勇軍ねえ……」

今の時代義勇軍なんてよく或ことなのになんでこんなもの見せるのかしらね？

私はそのまま記されている字を読み続けて……ある一文で読むのをやめた

「……これって」

「そうよ。霊夢と同じ……とわ言い切れないけど別の世界から来た男が二人いるのよ」

「二人……ねえ。」

一人はうる覚えの記憶の中で覚えてる恋姫の主人公、本郷一刀だとして……もう一人の男はなにものかしら

「それで、私にこの人達を見てきて欲しい……ってことかしら？」
「ええ、その通りよ。」

……ま、最近体動かしてないし、丁度いいわね

「分かったわ。ただし、一人だけ私の隊から連れていくわ、それと隊の事は灯里に任せるから灯里への書類……少し減らしてね」
「わかってるわ。あの子にこれ以上書類を渡すと倒れかけないからね」

「さて、それじゃ、準備できしだい、行かせてもらおうわ」

「ええ」

私はそう言い残して部屋を後にする。さあてと……誰を連れていこうかしら？

「あ、霊夢様。」

「ん？ああ、里奈^{りな}」

私に話しかけてきたのは張？。真名は里奈だ。里奈は私の隊で灯里の次に強い娘よ。そうだ。里奈を連れていくかしら

「ねえ、里奈」

「はい？」

「今、華琳から義勇軍に私みたいな人がいるから見に行ってくれて言われたのよ。どうかしら？」

私の事は華琳達に話してから自分の隊全員にも話してある。それでも私に付いてきてくれるってできてくれたことは嬉しかったわ

「はい。大丈夫です。ですが私みたいな者が一緒に行ってもいいのですか？灯里が適任では？」

全く……この娘もこの娘で少し遠慮がちなのよね

「灯里には隊の事を任してるわ。だからあなたに付いてきてもらいたいよ」

「そういうことでしたら……わかりました」

やっと理解してくれたわね……毎回毎回こうだと私がもたないわ

……

「それじゃ、二刻（約三十分）後位までに準備を終わらせていて」
「はい」

私は出発の時間の少し前の時間を指定して、それまでの時間を里奈に伝えた

後は灯里に言うだけね。納得してくるかなあ

灯里の説明は少し時間掛かると思ってたんだけど……意外とすんなり行ったわね。やっぱり華琳から言われたことでもあるからかしら？ 兎も角

「行くわよ」
「はい」

私と里奈は馬を使い、華琳に任された調査に向かう
今日の能力は【狂気を操る程度の能力】なのよね……【風を操る程度の能力】だったらまだよかったのに……【境界を操る程度の能力】でもどうなるかわからないから使いようがなかったけど

とりあえず華琳は五日程って言ってたわね……途中何かいい能力こないからしか。というよりランダムってこう言う時にあれね
ま、いいや。とりあえず、早く行きましょ、帰りに【境界を操る程度の能力】がきたら戻つ来れるのが早くなれる程度って思っておいたほうがいいわね

そんなことを思いつつも馬を走らせること十時間位かしら？ 私たちは今、森の中にある整備された道を通っている

「……里奈」
「はい」

私が里奈にも声をかけ、馬を止めさせる。すると回りから頭に黄色い布を巻いた男達が出てきた
数は……十数人かしら

「へへへ……俺らも運がいいなあ。こんな極上の女を見つけることが出来たなんてなあ」

下種ね。気配すらうまく隠せていない。ただ、数人だけ隠せていたわね

「里奈、準備いいわね」

「はい。何時でもいけます」

私は腰から蒼月を、里奈は馬に付けていた自身の武器、鉄鉤てつこうを取り出し腕に付けた

「おお、やるのか？」

「ええ……勿論、あなたたちの死でね」

そう言い、近づいてきた男の頭を切り落とす
というかなんで近づいてきたのかしら？女だからって油断してたの？まあ、私は男だけど

「な！？ちい、お前らやつちまえええ！」

『おおおおお！』

奥にいる大男の掛け声と共に私たちに突っ込んでくる山賊達。統一出来てなくてバラバラ……こんなの刀一本で十分ね。針は……いらないわね

今日の私はナイフじゃなくて針を持ってきている。ナイフより針のほうが気づかれぬし……

「里奈、後ろは任せるわ」

「わかりました。私の後ろもお願いします」

「言われなくても！」

私たちは馬から降りることなく、迫り来る山賊達を切り捨てる全員がバラバラに攻め手来るから対処が簡単だから、一々降りる意味がない……って言った方がいいかしら？

まあ、そんなこんなで迫ってくる男達を切り捨てること数十分……周りにいた男達は全て死に、残っていたのは頭らしき人物だけだった

「さあ、残りはあなただけよ」

「な、なんだってんだよ」

男が何か言ってるようだけど、私はそれを無視して、刀を振り上げ、降り下ろそうとしたとき――

「！？」

――どこからとなく矢が飛んできて、それを刀で全てたたき落とす。く！どこにいるの！

私は回りを見渡し、矢を撃ってきた者を探そうとする。すぐ隣で男が何処かに逃げようとしてるけど今はこっちが優先！

――ヒュン――

今度は真後ろから矢が放たれた。いつのまに！？私はそれをたたき落とすが――

「きゃああああー!!」

里奈は無理だったようで足と、馬の足に矢が刺さっていた

「里奈！？仕方ないわね！」

私は能力【狂気を操る程度の能力】を使い、相手が何処を移動しているか波長を読み取る。く……以外と素早い。これなら気づかれずに反対の木まで移れるってわけね……これは中々見つける事は難しいわね……でも！

私は針を取り出し、波長で分かった位置を考慮に相手が移動する場所を予想して――

「そこね！」

――その場所に針を投げる

「くう」

命中したようね。呻き声が聞こえた。私は続けて針を投げようとしたけど、挿さった針を抜いて投げたのか、私の針が投げられていた。

私はそれを手で掴む。そして能力を使い波長を読み取るも相手の波長が見当たらない……逃げられたわね

そう言えば弓を使ってた敵……一度も急所を狙わず腕や足を狙ってきたわね……殺すことが目的じゃなくて足止め？……考えて居て

も仕方ないわね。とりあえず馬から降りた私は里奈の元に向かう

「里奈」

「霊夢……様」

私は里奈に近づき、傷元を見る。矢は……結構深いわね。でも治せない怪我じゃない

「少し痛いと思うけど、我慢してよね」

「はい……」

私は矢を一気に抜く

「うう……」

私は抜いた矢をすぐそばに置き、手元に霊力を集中し、里奈の足の傷にゆつくりと触れる

普通の人間にこんなことすれば拒絶反応が起こり、体の組織が崩壊して死にいたる。けど同じ霊力を少量でも持っているものにやったら？ 答えは拒絶反応を起こさない。里奈には少しだけ霊力（この世界で言うなら氣と言いたい）が感じられたから大丈夫。けど大きすぎる傷は治せないし死者を蘇らせることなんて不可能。今回の傷は治せる範囲だったから出来たことだ

私が霊力を当てること数分……里奈の足の傷は傷跡すら残さず消えた

「どう、里奈？」

「はい、大丈夫です」

里奈はそう言い立ち上がろうとするが……倒れそうになった

私は倒れる前に里奈の腕をつかみ、支える

「あ……」

「全く……無茶しない」

「すみません」

「気にしないでいいわ」

それより、今の相手は誰だったのかしら……波長は覚えただけで、次あいつと出会ったときに同じ能力である確率は物凄く低い……確認の仕様がないわ。とりあえず、馬が一匹駄目になっちゃったわね

「はあ……後で華琳に報告しないとイケないわね。とりあえず行くわよ」

「あの、霊夢様」

「何よ」

「私はどうしたら……」

何言ってるのかしらね。分かりきっていること……って私が分か
ってるだけね

「私と一緒に馬に乗ってもらっわ。うん良く【境界を操る程度の能力】がきたらそれを利用して一気に村までいってもどるだけよ」

「わかりました」

私はそう説明しながら馬まで里奈を連れていき、先に馬に乗り、
里奈を後ろに乗せる

「行くわよ。しっかり捕まっとなさい！」

「はい！」

里奈にそう注意したあと、目的の場所目指して馬を走らせる
次あったら容赦しないわよ……

第六話 調査（後書き）

今回は眠いので後書きコーナーはなしで……眠い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7030v/>

恋姫†無双 望まぬ転生

2011年11月21日05時04分発行